

療法士が手術見学する意義

施設名：稲次病院

発表者：河村 和也 (作業療法士)

共同演者：稲次 正敬 (医師) 湊 省 (医師) 稲次 圭 (医師)
稲次 美樹子 (医師) 高田 信二郎 (医師) 土井 大介 (理学療法士)
一宮 晃裕 (理学療法士) 森 憲吾 (作業療法士) 井内 亮太 (理学療法士)

【緒言】

術後のリハビリテーションにおいて、患者の状態把握やリスク管理は言うまでもなく重要である。療法士にとって個々の術式や手術時の状況を見る機会は、非常に多くの情報をもたらしてくれる。当院で実施した整形外科手術において、療法士が見学に入る機会を得ることができた。当初教育的狙いで始めた取り組みであったが、その意義を再確認し、今後の運動器リハビリテーションの質向上に役立てたいと考え、振り返ることにした。

【対象と方法】

令和2年7月から令和3年6月に至るまで176例の手術見学に参加。術式内訳は、股関節人工骨頭挿入術13例、大腿骨近位部骨折における骨接合術23例、下腿・足部骨折における骨接合術10例。他、手根管開放術等、手の外科に関する手術を130例見学。見学した療法士17名、職業経過年数平均7.4±14.6年であった。未見学者を含む当院の理学療法士、作業療法士を対象にアンケート調査を実施。見学における意義、学びを調査した。

【結果】

手術について興味・関心があるか？回答：ある21名(70.0%)、ない4名(13.3%)。手術見学した療法士のうち、見学後にどのような気づきや学びがあったか？(選択式複数回答有)回答：見学者の60%以上が、解剖学・脱臼肢位や挿入肢位・手術の手順や流れに対する理解が深まった、切断・侵襲する組織の範囲を知れた、全身状態、塞栓・脱臼予防に対する意識が高まったと回答。見学後、アプローチにどのような変化あったか？(選択式複数回答有)回答：労いや共感する言動が増えた(64.7%)で最多。全身状態により気を配るようになった(58.8%)、塞栓予防の為バンピングやその指導をより行うようになった(52.9%)と回答した。

【考察】

今回の調査で多くの療法士が手術について興味・関心があり、見学の機会を有意義に捉えていることが分かった。手術見学は、周術期・術後のリハビリテーションを担う療法士にとってプラスに作用すると思われる。この経験を、リハビリテーションに活かしていくには、手術や周術期に関する学習・研鑽を重ね、明確な目的意識や視点を持って見学に臨むことが大切と思われる。今回の調査結果で筆者が最も有意義と感じたのは手術見学した療法士が患者に対して労いや共感する言動が増えた事であった。術後、「手術お疲れ様でした」と心から声かけ出来ることは術後リハビリテーションの良き一歩になると思う。